

# 1999年奈良かぎろひロマンチック街道132km

(1999年5月22日～5月23日)

山猫@滋賀

今年のウルトラ初戦となる「奈良かぎろひロマンチック街道132km」の日が来た。大会に出るのは何と4ヶ月振り。ハーフやフルなら心配もあるが、ウルトラはトレーニングである程度の目途が見えるので、GW中の走り込みでも結構調子が良かったし、4月からの通勤ランや水だけでの早朝ランの成果も出ると確信していた。132kmは自己最長だが、昨年秋の「熊野黒潮130km」のような後半のバテだけは回避したいとの思いが強かった。

5月22日当日は宿谷さんと草津駅で待ち合わせ、近鉄経由で奈良に行く。かつて富士五湖117kmで前半トップを走ったこともあり、びわ湖アイアンマンや飛騨ウル完走者でもある宿谷さんも、ここ2年ほどは極度の不振で先月の宮古島トライアスロンでのギリギリゴールも心配だ。

この時期は寒暖の差が大きく、特に奈良南部・吉野は山奥なので、どれくらい冷え込むか見当もつかない。それでウェアも複数用意するとかなりな荷物になってしまった。時間が中途半端ではあるが、腹ごしらえしなければと“カツ丼”と“きつねうどん”を食べる。奈良は観光地なので値段が高い割に美味しくなかった。

3時30分頃に「奈良新公会堂」に到着すると松田さんと林さんが受付をされていた。林さんとは初対面。とても色白な方だ。奈良新公会堂はとても綺麗な建物だ。ここで中川さんと会う。開会式場に入ると長村さん、岡野さん、遠く千葉県松戸から来られた初対面のUMMLer大塚さんと顔を合わす。

開会式は整然と行われ、奈良県ウルトラマラソン協会の役員、参加者、スタッフが一同に介し、全員の紹介もあった。プログラムを見ると関西周遊、さくら道、萩往還、飛騨ウルなどを完走した強者揃いだ。

今回はファイテンインドリンク、カーボショッツを水に溶かし、補給に充てることにした。吸収が早く、食べられない時でもスタミナ切れを防いでくれそう。夜間走では下はロングタイツ、上はバイクアンダーウェアに白の長袖FSジャージーで臨むことにした。FSジャージーは速乾性なので良いと判断。時差スタートだが、私のスタートは18時40分。宿谷さんは19時だった。

東大寺南大門の前に行くのと竹上さんの応援があり、スタートを待つ。正月に東海道五十三次遠足の応援に行った時、小林さんと一緒に写真を撮った日垣さんが声を掛けてくれた。明日、小林さんの応援があるとのこと。ディパックを背負って走られるようでジャーニーランをされる方はやはり違う。

UMMLのメンバーが固まった中、18時40分に10人のグループでスタート。南大門から奈良のメインストリートを少し走り、県庁前で右折。商店が並ぶ狭い歩道を北に走り1.5kmからは歩道がない上りに入った。いきなりなのでかなりきつい。



この辺りで既にバラバラ状態。前にいる男女2人を追うが、差は詰まらない。空は薄く曇っており、日が暮れるのが早いようだ。曲がりくねった国道369号線は狭い割に車の量が多く、薄暗い中注意して前に進む。

既に頭は汗びっしょり。温度は高くないにも関わらず、何故こんなに汗が出るのか不思議だ。約5kmの上りが終わり、8kmくらいの地点でアクエリオスを補給。一旦平坦になるが、再び円成寺までは上りが続いた。この辺りでヘッドライトをウエストに付けるが、どうも電灯とベルトのくい付きが悪くすぐ外れてしまい、先が心配になる。この心配はこの時だけで済んだのが幸いした。この間に前の2人は完全に視界から消えていた。

14km地点の大柳生から柳生までは自販機もたくさんあり、平坦な民家が固まる中を進めた。柳生三叉路手前のCPに松田さんがいたので水を貰う。

柳生三叉路19kmを右折すると道幅が広くなり、走りやすい。それもつかの間、また寂しい上りに入ると先程抜かされた男女2人が右端を走っていたので、左端から一気に抜かす。曲がりくねったところで後ろを振り向くと2人は視界から消えていた。23km付近では女性が筋肉痛でかがんでいた。声を掛け、先に進む。まだまだ上りは続いている。道路幅が広くなり、三叉路を右折すると間もなく水間交差点に差し掛かった。27.5kmを2時間46分、単純に6分/kmと上り基調の中、なかなか快調だ。柳生からは200m上ったことになる。

33kmエイドになかなか着かないのが気になる。大丈夫だろうか？。ここで先行組を3人ほど抜いた。平坦な中、一部アップダウンを繰り返し、戸ヶ坂トンネルを越えて平坦を進むと急坂が見えて来た。

少し歩いて上るとそこが都祁ランニングクラブの33kmエイドだった。長かった。ようやく辿り着いた感じだ。ガス欠にならぬ様、おにぎりやパン、水分、バナナ等をたっぷり補給し、先を急ぐ。エイドでランナーが固まった関係で前後に人が見える形になった。よく通る名阪・針インターの陸橋を越えると店が多くなり、コース上で唯一のコンビニ(ローソン)があったのでミネラルを買い、脚を冷やす。気持ちが良い。

ここからはしばらく道幅も広く、明るかったので歩道を走れた。止まっている間に抜かれても自分のペースが意外と速いのか、走り出すと直ぐに抜かせた。この頃には7人くらい抜いていた。自販機休憩をすませ、間もなくすると室生分岐点で右に折れ、一気に急坂。また歩く。実際は針から徐々に上っていたようだ。

42km辺りの香酔峠手前の上りで歩いている人を見掛け、一気に抜こうとすると長村さんだった。長村さんに合わせ、一緒に歩いて峠まで上る。峠を越える前から聞いていた一気の下りになり、長村さんとは別れる。コーナーがきついので持っている灯りだけではかなり薄暗い。ここで左端に屈んでいる女性を見つけたが、後で聞くと実はこれが岡野さんだった。看板には10%の勾配と書かれているが、夜なので体感はそれほど感じなかった。それでも太股、膝への負担がかなり大きいのがわかる。篠楽までの5.7kmで230m下っていた。この頃には空は晴れ渡っていた。

そして、50kmASのCPが迫ってきた。食べられるのが楽しみだ。おにぎりやパン、飴、バナナを頂くが、おにぎりは半分しか食べられなかった。50kmは5時間12分。もう24時間前だ。ここからは平坦で走りやすいコースに変わった。徐々に風が強くなり、若干肌寒いが手袋はいらない。この頃、後に一緒に走ることになる吹田の渡辺さんと声を掛け合う。「速いですねえ～」と言われた。ペースは6分/kmくらいだと思う。佐倉峠辺りで電灯の灯りが弱くなり始めたと思うと急に消えた。暗いので予備の電池に交換するのも手間取る。

渡辺さんが抜かしながら「直ぐに追い付きますよ」と声を掛け、前に出た。間もなく吉野杉に囲まれた林道のようなコースに入っていく。すると間もなく渡辺さんに追い付き、差を広げる。鷲家口・大又分岐からは左に高見川の清流、道路の左右には真っ直ぐに立った吉野杉、清流の音が暗闇の中での寂しさを和らげてくれた。しかし、全くのひとり旅だ。そして、電灯を持っていないと前は全く見えない。吹き出す汗を手に持ったタオルで拭き、そして絞りながら前に進む。快晴の空には星が一面で、何とも気持ちが良い。そして、疲れもさほどでない。

70kmまでは下り基調なのでペースは上がっていた。7時間24分、良いペースだ。この分だと15時間で・・・、何て思った時期だった。汗びっしょりなのでトイレで顔を洗い、汗を落とす。林さんがエイドを担当していた。パンや飴、オレンジ、水分をたっぷり補給し、熱を持った足にワセリンをたっぷり塗っていると中川さんが追いついて来た。もの凄いペースのようだ。1時間20分後のスタートだから、正直びっくりした。凄い思い入れようと気迫を感じた。先にスタートしたが直ぐに抜かされ、見えなくなった。

70kmエイドを過ぎてもまだ寂しいコースに変わりはない。しばらく進むと両側に民家が見え始めた。ようやく自販機を見つけたので給水。民家の間を進むとCPに人がいたので安心する。そこを越えると急坂が目

の前に迫り、少し走った後、歩き出した。関戸峠が難所と聞いていたが、どこが関戸峠かわからない。入野トンネルが見え、オレンジ色の電灯が真っ暗闇の中、妙に眩し過ぎる。前方からスピードを出した車が来たので思わず避ける。

その後、短い2つのトンネルを潜った。道中はアップダウンの繰り返し。しばらく進むと道路幅が広くなり、平坦となる。今まで多かったCPや進行方向の看板が全くなく、スタッフの車とも74kmから出会っていないので心細くなる。三茶屋交差点の自販機で休憩しながら、地図を広げコース確認するが間違っていない。なのに誰とも出会わないのが気掛かりだ。上りを真っ直ぐに先に進み、下った後の灯りのある作業場で再び地図を確認する。

コースは間違いないと思うが心配。連絡するにも電話もない。「どうしようか？」とウロウロしているとひとりのランナーの姿が見えたのでコースを確認すると「ここだと思う」とのこと。人に会うのは久しぶりで、74kmからなので1時間以上前になる。

再びコースに戻り、前に進む。空は幾らかではあるが明るくなり始めている気がする。走ったり、歩いたりしながら進むとようやくスタッフらしい人影が見え始め84kmポイント。83kmは無かった。83kmが関戸峠で9kmの間で200m上っていたが、実際にはあまり感じなかった。走れなかったのは上りだったせいかもしれない。

右に折れ、民家が左右にある旧街道に入るが着替えの出来る大宇陀公民館の姿が遠く感じる。「これで正しいのか？」とまた思う。左手に赤のランプが点灯、大宇陀公民館85kmに到着。70kmからは辛く、長かった。85kmは9時間27分。この間は2時間以上掛かった。

中に入るとシューズを脱いで、畳の上上がる。ホッ~とした。荷物を降ろし、先ず歯を磨く。後半用のウェアに着替える。バイクウェアに赤のランパンにした。ようやく蛍光ベストが取れた。エネルギーの方はファイテンインドリンク、カーボショットをボトルに入れ、水で混ぜ合わせて後半に備えた。足の甲が痛み出しているのでポランテゲルもたっぷりすり込んだ。パンやオレンジ、みそ汁などを口にしていざ出発。

公民館に入った時は暗かったが、出る時には外はすっかり明るく、気持ち良い気分だ。結局、33分も休んだことになる。ここで吹田の渡辺さんとゆっくり合わす形で併走する。渡辺さんは夜間も話しかけたので話しやすかった。

いろいろと話しながら、ペースを渡辺さんに合わせて平坦を進む。このコースを熟知している渡辺さんにコースを聞けるので安心だ。「香酔峠が大変」と何回も言われていた。その頃、右足甲はかなりの炎症が進んでおり、左太股や左足甲にも痛みが出ていた。既に時間の計算は出来ていたので出来る限り歩いてゴールしようと決意。

明るくなるとどうしても歩道を走らなければならない、辛いところだ。私が走り出すとかなり先行するが、歩き出すと渡辺さんが追いつくパターンが続く。篠楽T字路を左折すると昨夜のコースを逆走することになる。ここからは小刻みなアップダウンのある団地の通り抜けだ。ここが榛原中心街に近いところらしい。

間もなく橋を越えると玉立・大宇陀分岐に差し掛かり、また左折。ここからが厳しい香酔峠、10%の上りだ。完璧に歩き出す。1.7kmで150m上っており、ずっと歩く。渡辺さんはかなり遅いスピードながら走り続けている。心から偉いと思う。

香酔峠を上り切るとなだらかな下りが続き100km CPがある。ここも歩きと走りを交互に混ぜながら、だましまし進む。ベテランランナーにここで一気に抜かれる。全然、足の運びが違うことに気付く。平坦になると渡辺さんにしっかり付いてゆっくりながら走った。100kmは室生分岐・外の橋で松田さんにパンや飴、水分を頂き、腰を降ろして5分ほど休憩。渡辺さんは大分先に行ってしまった。時計を見ると11時間52分。そんなに悪くない。

それでも前方の渡辺さんに食い付こうと走ると差が詰まり、針ではすぐ後ろまで来られた。ここでの歩道



はとても走りにくかった。幾分下った頃、前方のランナーがひとり見え始め、渡辺さんは「坂を上った先が107kmの都祁ランニングクラブエイド」と教えてくれた。

私も痛い足を引きずりながら走って上った。パンや水分を補給し、ワセリンとボランテゲルで足を保護する。この後は小さなアップダウンを繰り返し、水間交差点を目指す。その前方のランナーが奈良の植田さんだった。植田さんとはこの5kmくらい前後する形となった。戸ヶ坂トンネルを越え、歩いたり走ったりを繰り返すが、徐々に歩きの方が多くなる。水田地帯はのどかで疲れを癒してくれる。徐々に暑くなってきた。もう7時半頃となっていた。

110km付近で何故か鼻が変だなあ〜と思うと鼻血が出ていた。慌てて持っていたティッシュを右鼻に突っ込む。5年前の野辺山と同じだ。大丈夫だろうか、心配だ。もう無理はせずに出来る限り歩き、完走を目指すのみだ。しかし、公言した16時間台は実現したい。

112kmは水間交差点。ここを左折すると水間峠、須山峠の難関があり、500m以上下ることになる。足を痛めたものにとってこの下りは試練そのものだ。鼻血状態で112kmの水間交差点を左折すると今度は奈良市内に一直線だ。このCPの人は鼻血のことを何も言ってくれなかった。何か言って欲しい気もした。左折すぐに縁のある自販機があり、渡辺さんに追い付いた。後続の植田さんも合流。植田さんはダブルフル以上の距離は初めてで苦しいと言っていた。ここから水間峠へは急坂が続く。ひたすら歩きながら峠を目指す。113kmで水間トンネルを通らず、旧道にコースが変わるので右に寄った。ここには伊東さんがいて、冷たいスイカと水を頂く。暑くなってきたのでとても美味しい。1kmほど進むと峠に達し、眼下には田原の街並みが一望できた。

ここから一気に下りだ。10%以上のヘアピンカーブが続き、ゆっくりながら走って下る。痛みのため、ブレーキを掛けての急な下りは辛い。2kmほど急な下りが続いた。その間に新道と合流、車も多い。平坦になってからはかなり暑く感じ、水分も欲しくなる。影がないので辛い。

しばらく走ったり、歩いたりして自販機で休憩していると大塚さんが一気に迫り、抜かして行った。ベテランの力強い走りを後ろから見ながら走り出す。名荷で右に折れると須山峠までは2km。大塚さんの姿は小さくなり、そして視界から消えた。ここからはまた歩きの世界。上りは急ではないが、右足甲の痛みで走れない。

120kmの須山峠CPには9時24分に到着。スタートから14時間44分経過していた。大塚さんがまだ立ち寄っていた。ここからの下りが一番長く、辛いと言われた。ここには林さんがいたのでパンやバナナを頂く。そして、ボランテゲルをまた塗る。5分ほど休み、須山峠を下って行く。車の量がとても多くなり、左端を走らないと危険だ。東紀寺三叉路までは6.5kmで330m下らなければならない。水間峠の下りと違い大きなカーブの下りだ。下りなので何とか走らねば、と辛抱しながらゆっくり走って下る。辛いので歩き出すこともしばしば。徹夜とその疲れ、スタミナ切れ、全てが要因だと思うが、やはりウルトラの最後は厳しい。これが試練というものだ。でないと、もっと長い距離には対応できない。前方には奈良市内が迫って来た。しかし、遠そう。

124kmの奥山ドライブウェイ入口にエイドがあった。誰かと思うと河内長野の小林さんが個人エイドを出してくれてくれた。先週の「鯖街道」を走られたそうで、足にはテーピングされていた。小林さんは最初気が付かなかったが、顔を見て思い出してくれた。「河内長野RC会報」を2月に送って頂いた御礼を言い、スイカと水を頂く。スプレーも貸して貰った。「もう店じまいしようと思っていた」と言われていたので、会えたのが嬉しい。歩いていると緩い坂で関西周遊のTシャツを着た高山さんが声を掛けながら抜かして行った。住宅街になるとほぼ下り切り、もう奈良市内は間近だ。

東紀寺三叉路CPは126.5km。ここで右折すると賑やかな通りになり、観光客が目立ち始めた。小刻みなアップダウンのある歩道で足元を気にしながら進むと前方からKadoさんと佐田さんがこちらに向かって応援に走って来たではないか。Kadoさんの服装はカッコ良かった。結局、120kmエイドまで上ったそうである。凄い。

1km進むと大仏殿前交差点。昨日、受付に向かった場所だ。もうすぐゴールだ。奈良公園の観光客やつろろぐ人々の中をかき分け、メイン通りを歩いたり、走ったりして朱雀門を目指す。距離がとてつもなく長く感じる。タイル張りの部分は疲れた足には応える。奈良市内に入ってから車の量が極端に増えたので暑くて喉が渇く。踏切を越え、国道24号線の高架下を潜ってもなかなか朱雀門は見えない。道は正しいのか、の疑

問が始める。

SOGOの先と聞いていたが、そのSOGOが見えない。水が飲みたいのでコンビニを捜すが見当たらない。焦る。ようやくコンビニがあったのでミネラルを買い、頭から掛ける。気持ち良い。

SOGOが見え、その先の交差点を右折と聞いたので、「これで良いのか」と思いながらも右折する。平城宮跡は見えるが何故か、コース間違いしたみたい。周りの人に聞くが、大会のことは知らないので、話がかみ合わない。ゴール直前なので思わず焦ってしまう。地図を広げながら、確認するがわからない。取りあえず元のコースに戻り、再び西に向いて走り歩きする。

そして、しばらく進むと小さな看板に右折の矢印があり、「ここを曲がればゴールか」と思った。看板まで進むと大きな広場の向こうに朱雀門が見え、スタッフや先にゴールした人、応援者の声が響く。広大な朱雀門前の広場を独り占めにして走れる喜びでいっぱい。疲れた身体で必死に走るがペースは遅い。「ラスト、ラスト」の声に応え、ラストスパート。朱雀門前、5月23日11時11分にゴールテープが切れた。ゴールタイムは16時間31分。



ホッとした、嬉しかった。辛かったが、もうウルトラは嫌だと今回は思わなかった。何故なんだろうか。ウルトラマラソンを理解してくれているスタッフばかりの大会だったからではないか。河野守道奈良県ウルトラマラソン協会会長がにこやかに迎えてくれた。NAMIさんもわざわざ応援に駆け付けてくれていた。中川さん、松田さんも迎えてくれた。

中川さんは12時間30分弱でゴールされていて2位ながら、とても元気だった。日差しは強くなり、暑い。少しポォ～としている。河野会長が朱雀門をバックに写真を撮ってくれ、その後に完走証の授与を受けた。完走の証は嶋守哲夫画伯の南大門を描いた額だった。



腰を下ろし、その後ゴールする方々を待つ。宿谷さんのことも気になる。30分すると112kmで一緒だった植田さんがゴールしたので出迎え、握手。制限時間すこし手前で長村さん、岡野さんら4人が同時ゴール。この中に松倉さんもいた。松倉さんは草津にお住まいで会社の隣人だった。今年の「さくら道」も完走されているベテランウルトラランナーでとても気さくな方だった。その後、宿谷さんは吐土しており、非常に危険との情報が入り、心配になってきた。大会サイドとしては「リタイヤするよう告げる」と松田さんから聞いた。

心配ではあるが、取りあえず「かんぽの宿」へ向かう。風呂に入り、大広間で食事。宿谷さんはリタイヤしたが、無事に帰ってきて安堵する。Kadoさん、佐田さん、松田さん、林さんも来られ、ビールで祝杯。あまり食べられず、すぐに横になる。徹夜なので睡魔が一気に襲うと熟睡になる。そして、松倉さんと宿谷さんと3人で帰路に着いた。

**『かぎろひを走らずして、ウルトラを語るなかれ。かぎろひを完走せざれば、真のウルトラランナーにあらず』**



まさに厳しいコース、ウルトラそのものだった。醍醐味は112kmから残り20kmに2つの峠越え、延々と続く下りが象徴している。多くの仲間と会え、多くの人と知り合えた。本当に参加して良かった大会だった。